

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H04346

研究課題名(和文)引き揚げと帰国のはざま - 1950～1970年代における日本への帰還

研究課題名(英文) Between "repatriation" and "returning home": "Returns" from former colonies to Japan in the 1950s to 1970s

研究代表者

玄 武岩 (Hyun, Mooam)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：80376607

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,000,000円

研究成果の概要(和文)：従来の研究では、中国、台湾、朝鮮半島、サハリンなど外地から内地への戦後日本人の帰還を、終戦直後の「引き揚げ」と1980年以降の「帰国」という2つの群に分けて捉えてきた。それに対して本研究は、そのはざまの1950-70年代には従来の枠組みでは捉えきれない独特な帰還体験が多数存在することに注目し、帝国日本の崩壊後の移動を多面的に再考することを試みた。「引き揚げ」と「帰国」およびその国策の転換過程を検討した結果、戦後日本において帰国政策が誕生する際の政治的メカニズムの一端が見えてきた。さらに、国民国家へと変貌する日本を目指して越境する人々を包摂/排除する社会的・文化的メカニズムが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本における外地から内地へ移動を、1950-70年代における独特な帰還体験に注目し、「引き揚げ」と「帰国」の概念的区分を理論的に定立することで、「引き揚げと帰国のはざま」というテーマを引き揚げ研究のなかに位置付けた。また、「国の政策」と「人の生活」の側面を架橋する視座を提示することで、引揚者と残留者の生活面へのアプローチから、地域史と全体史を連結する視点を見出した。これは、中国、台湾、朝鮮半島、サハリンなど引き揚げた地域の枠組みを越えて、グローバルな視座から引き揚げという歴史経験を浮き彫りにし、専門とする地域が異なる研究者や一般の人びとがこの問題について理解を深める大きな助けにもなる。

研究成果の概要(英文)：In previous studies, the return of postwar Japanese from Japanese colonies and occupied territories (gaichi) such as China, Taiwan, the Korean Peninsula, and Sakhalin to Japan proper (naichi) was divided into two categories: "repatriation" which occurred immediately after the end of the war and "return" which happened from the 1980s onwards. In contrast, this study focused on the many unique return experiences that happened from the 1950s to the 1970s and that could not be explained by the conventional framework. As a result of examining "repatriation" and "return" and the change of the Japanese government's national policies, the part of the political mechanism when the "return" policy was begun in postwar Japan became clear. Furthermore, this study clarified the social and cultural mechanisms that included/excluded people who crossed the border toward Japan while it was transforming into a nation-state.

研究分野：日韓関係論

キーワード：引き揚げ 帰国

1. 研究開始当初の背景

終戦後、中国、台湾、朝鮮半島、サハリンなどの外地から「内地」への日本人の移動は「引き揚げ」と称された。1980年代以降、中国やサハリン残留の日本人が引き揚げてくるが、かれらは厳密には「引揚者」ではなく「帰国者」である。日本の引き揚げ研究において両者を区別するようになるのは近年のことであり、したがって「引揚者」が時代の経過とともに「帰国者」へと移り変わっていく戦後の溝に落とし込まれ、引揚援護や帰国支援の対象にならなかった人たちは忘れ去られた存在であった。しかし、この1950～70年代の独特な帰還体験への理解なくして、帝国日本の崩壊による人の移動を十全に捉えることはできない。従来の中核に収まらない戦後日本の帰還における独特の移動の歴史を究明することで、戦後の旧植民地から日本への移動の全体像の把握に欠けたピースをはめることができるのである。

2. 研究の目的

本研究では、以上のような「引き揚げ」と「帰国」のはざまの帰還体験を視野に入れ、引揚援護や帰国支援の対象にならなかったこの時代の日本への移動を、以下の2点を中心に考察した。

「引き揚げ」と「帰国」およびその国策の転換過程を明らかにすることで、概念的に定義し、戦後日本における「境界」の生成と再構築を明らかにする。「引き揚げ」と「帰国」という枠組みで一枚岩的に語られてきた帝国日本の崩壊後の移動を多面的に再考することで、国民国家へと変貌する日本を目指して越境する人々を包摂/排除する政治的・社会的・文化的メカニズムを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本共同研究の各メンバーがそれぞれ専門とするフィールドを中心に、1950～1970年代における中国、台湾、朝鮮半島、サハリンから日本への「引き揚げと帰国のはざま」における移動に関する文献調査および歴史的事実の解明に取りかかった。1950～1970年代の中国残留日本人、台湾残留日本人、在韓日本人女性、サハリン残留日本人および先住民族の移動と定住、帰国と送還について調査研究を進める一方、書評会や研究会をとおして「引き揚げ」と「帰国」の概念的区分を理論的に定立し、研究活動をとおして得られた知見を既存の引き揚げ研究の分野で打ち出していくことが活動の中心となった。

4. 研究成果

研究代表者の玄武岩は、外務省外交史料館所蔵『在韓困窮邦人(引揚等諸問題)』を分析し、戦後、旧帝国領土に残された日本人に対する日本政府の帰国政策において、どのような認識的な変化をともなって「引き揚げ」が「帰国」へと転換したのか、1969年に始まる在韓日本人女性に対する日本政府の公的帰国支援の考察をとおして明らかにした。

これまで在韓日本人女性に関する研究は、主にインタビューによる体験にもとづいた生活史の記述が中心であった。そこで玄武岩は、在韓日本人女性の移動・定住・帰国に関する実証性にもとづいた歴史的事実の解明を試みた。日本が帝国主義的な拡張を続けるなかで登場し、民族・階級・ジェンダーの結節点に位置した在韓日本人女性はどうのように「戦後」の韓国をくぐりぬけてきたのか。その移動と定住、帰国と送還について、日韓関係の政治的交渉をたどりながら考察したのが、拙稿「在韓日本人女性の戦後 - 引き揚げと帰国のはざま」今西一・飯塚幸編『帝国日本の移動と動員』大阪大学出版会、2019年である(JP17HP5082)。

その後、研究代表者は『在韓困窮邦人』を入手した。この資料は、本共同研究の問題意識である「引揚者」が時代の経過とともに「帰国者」へと移り変わっていく戦後の溝に落とし込まれ、そして忘却されたという仮説を実証的に裏づけるものである。実際、中国帰国者の二世や三世が新しいアイデンティティの可能性を模索するのは異なり、在韓日本人女性と同伴帰国した子世代の存在性はすっぱり抜け落ちているのだ。ところが、『在韓困窮邦人』の考察を通じて、歴史に翻弄された在韓日本人女性は自らの歴史的存在性を表してきたことが浮かび上がってきた。帰国して関係省に陳情書を送り続け、各地でピラを配って訴えた在韓日本人女性の「行き過ぎた要求」は、やがて戦後日本の歴史的责任が問われる国の事業を確立させていったのである。

日本の帰国政策の確立をその連続性からみれば、自らの存在を「日韓併合時代の未処理問題」と位置付け、それに対する国家の責任を問う異議申し立てを展開した在韓日本人女性の「遅れてきた“引き揚げ”」は決して無意味ではなかったといえる。なぜなら、在韓日本人女性の特別措置

をめぐり関係各省での議論が、どのように中国残留日本人の帰国対策へと結びついていったのかの考察は、戦後日本の帰国政策の確立と連続性を明確にするためにも欠かせない作業だからである。在韓日本人女性をめぐり問題は、中国からの帰国事業の前史であったのだ。このように「引き揚げ」から「帰国」へと国策が転換することを、戦後、中国、台湾、朝鮮半島、サハリンから日本への帰還における移動の歴史に位置づけるために、本共同研究の各メンバーは、それぞれ専門とするフィールドを中心に、1950～1970年代における「引き揚げと帰国のはざま」の移動の究明に取りかかった。

研究分担者のブル・ジョナサンは日本語の海外引揚に関する研究と英語の第二次世界大戦後のヨーロッパの人口移動とヨーロッパの脱植民地化後の人口移動の比較研究を通して、本共同研究と他研究の関連性と関係性を説明する枠組みを設定した。

研究分担者のパイチャゼ・スヴェトラナは、ロシア連邦外交政策公文書館と日本外務省外交史料館所蔵 1950～1960年代におけるロシアからの日本人の引き揚げに関する資料を分析し、この時代のソ連地域における集団引揚げから個人帰国への政策移行は、日本とソ連が相互に望み、国際交渉した結果であると明らかにした。

また、パイチャゼ・スヴェトラナとジェフ・ゲーマンとともに、国立サハリン州歴史文書館の戦後引揚げに関する資料分析をしながら、サハリンに残留されたウイリタ民族と引揚げた樺太アイヌ2世にインタビューし、1945年の日ソ最後の国境再分配後、アイヌは残留を希望したにもかかわらず北海道に移住させられ、ウイリタとニブフは日本に移動を希望しながらもサハリンに取り残された理由を明らかにした。両方の研究分担は、引揚げ及び帰国においては政策方針が優先され、「住民の意思」が尊重されず、住地選択の自由が全くなかったことが確認できた。

研究分担者の藤野陽平は戦後も台湾に残留した日本人女性のうち、満州から台湾へと移動した女性に特化して、その移動のあり方について資料の収集と分析を行った。台湾の残留日本人女性には、戦前に台湾に移住し台湾人男性と結婚した女性たち、戦前に日本で台湾人男性と結婚し戦後移住した女性たちに加えて、戦前に満州に移動しそこで中国人や台湾人男性と結婚して戦後国共内戦の激化と共に台湾へと移住した女性たちという3つのルートで台湾に移住した。満州からの移住についてはこれまで等閑視されてきたのだが、彼女たちは従来の台湾にあるエスニシティでは捉えきることができない独特な立場にある。その移動のあり方を紹介することで、従来可視化されてこなかった戦後満州から台湾へと移動した日本人女性という独特な存在について報告することができた。

研究分担者の富成は1947年から70年代にかけての国会議事録を用い、「引き揚げ」や「帰国」をめぐり問題が国会で議論された際に「引揚者」「帰国者」「帰還者」といった表現がどのように使われていたのかについてコーパス言語学の手法を援用した量的及び質的な言説分析を行った。これらの表現の使用頻度や共起語などの分析によって国会の議論を通して作られたそれぞれの表現から浮かび上がるイメージやその変化、また各年代での社会背景との関連性を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Jonathan Bull and Steven Ivings	4. 巻 31(3)
2. 論文標題 Return on display: memories of post-colonial migration at Maizuru	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japan Forum	6. 最初と最後の頁 336, 357
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09555803.2018.1544583	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Jonathan Bull	4. 巻 13
2. 論文標題 近年の英語圏のサハリン/樺太史研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北方人文研究	6. 最初と最後の頁 159, 163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 5件/うち国際学会 8件）

1. 発表者名 玄武岩
2. 発表標題 「海軍のまち」をつなぐ近代化遺産のストーリー - 象徴としての「戦艦大和」物語
3. 学会等名 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 2020台北大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Paichadze S.
2. 発表標題 Russian-speaking migrants in Japan in 1950s-1970s: Identity and issues to adaptation into Japanese society
3. 学会等名 II World Congress in Real and Virtual Mode East-West: The Intersection of Culture（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤野陽平
2. 発表標題 すれ違う台湾の日本神へのまなざしと実践
3. 学会等名 第34回慶応義塾大学東アジア研究所学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yohei FUJINO
2. 発表標題 From a cursing ghost to a god of friendship between Japan and Taiwan: The construction of gaze to Japanese spirits in Taiwan
3. 学会等名 The 2nd Annual Conference of the EASSSR 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤野陽平
2. 発表標題 シンポジウム「ボーダーから遠ざかりボーダーを意識する 台湾の国家人権博物館白色恐怖緑島記念園區の事例から」
3. 学会等名 国境と観光：国境地域に学ぶ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南誠
2. 発表標題 国際シンポジウム「戦後日本と本国帰還者との関係について」
3. 学会等名 日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南誠
2. 発表標題 長崎をめぐる海洋社会の展開に関する一考察：「満洲」を手がかりに
3. 学会等名 国際会議「和平之海：東亜の歴史と未来」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南誠
2. 発表標題 長崎と「満洲」の関係に関する一考察
3. 学会等名 国際シンポジウム「日中文化交流史における長崎の意義：『アジア共同体』形成の可能性をめぐって」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Jonathan Bull
2. 発表標題 Return on display: Memories of postcolonial migration at Maizuru
3. 学会等名 Joint East Asian Studies Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Jonathan Bull
2. 発表標題 Museums, memories and problematic narratives of forced migration: the case of the Maizuru Repatriation Memorial Museum, Japan
3. 学会等名 Narratives of Forced Migration in the 20th and 21st centuries（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 玄武岩・パイチャゼ スヴェトラナ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 本と共に (ソウル)	5. 総ページ数 328
3. 書名 サハリン残留者たち - 国家が忘却した存在の生の記録	

1. 著者名 玄武岩	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小花 (ソウル)	5. 総ページ数 578
3. 書名 『文化権力 - 帝国とポスト帝国の連続と非連続』(翰林大学校日本学研究所編、「在韓日本人の戦後 - 引き揚げと帰国のはざま」を分担執筆)	

1. 著者名 Mooam Hyun	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 258
3. 書名 New Frontiers in Japanese Studies (Akihiro Ogawa, Philip Seaton (eds.), Japanese women in Korea in the postwar: between repatriation and returning homeを分担執筆)	

1. 著者名 Paichadze S.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 258
3. 書名 New Frontiers in Japanese Studies (Akihiro Ogawa, Philip Seaton (eds.), Invisible Migrants from Sakhalin in the 1960s: A new page in Japanese migration studiesを分担執筆)	

1. 著者名 藤野陽平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 316
3. 書名 『アジアの公共宗教ポスト社会主義国家の政教関係』（櫻井義秀編，「戦後台湾の民主化運動における長老教会 - 三つの宣言と美麗島事件にあらわれた政教関係」を分担執筆）	

1. 著者名 藤野陽平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 830
3. 書名 『響きあうフィールド 躍動する世界』（和崎春日他編，「台湾の新移民の中の多様な在台日本人」を分担執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	パイチャゼ スヴェトラナ (Paichadze Svetlana) (10552664)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授 (10101)	
研究 分担者	藤野 陽平 (Yohei Fujino) (50513264)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授 (10101)	
研究 分担者	ブル ジョナサンエドワード (Bull Jonathan Edward) (60735736)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・講師 (10101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	南 誠 (Minami Makoto) (70614121)	長崎大学・多文化社会学部・准教授 (17301)	
研究分担者	富成 絢子 (Tominari Ayako) (80642644)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	ゲーマン・ジェフリー ジョセフ (Gayman Jeffry Joseph) (80646406)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関